

軍人を「偉い」と 信じた失敗

小59

堺屋 太一
(池口 小太郎)



「偕行社」から村立小学校へ

私が偕行社に通ったのは、1942年4月から45年3月の疎開転校までの三年弱、社会人になってからの時間感覚でいえば「僅か三年」だが、人生の最初としては結構長かった。

私の父は弁護士で、当時としては自由主義者だったが、学校は厳格な軍隊式教育で有名な偕行社が好きだった。六つ上の兄も、この年3月に偕行社小学校(前年4月から国民学校と改名)を卒業して、七年制の浪速高等学校尋常科(中学)に入ったばかりだった。

私が偕行社に入った42年4月は、太平洋戦争がはじまって5ヶ月、日本軍は破竹の勢いで勝ち進んでいた。それだけに「軍」の威光は高く、陸軍将校クラブ「偕行社」の経営する偕行社国民学校の人気は高かった。どんな問題だったか憶えていないが、口頭試問のような入試があった。

偕行社の教育は文字通りの軍隊式。毎朝の朝礼では夏冬の別なく裸足で運動場に立って、陸軍大佐の山口一校長の訓話を聞いた。「わが大和民国は東洋尚武の民であり、わが将兵は忠勇無双である。よって帝国陸海軍は無敵無敗である。わが一力師団はよく米英の三力師団に対抗し得る。」

山口校長はよくこんな話をした。小学校に入ったばかりの私は、この「一対三」というのを正確な数字と信じて言い触らした。

先生は厳しかった。私の学級担任だった尾崎先生は比較的優しくしたが、よく殴る先生もいた。体罰が「愛の鞭」と

いわれ、「口よりも先に手が出る」のも「男らしさ」といわれた時代だった。

その頃、私は日本の軍人、特に将軍、提督といわれる高級幹部は「偉い」と思っていた。地位階級が高いだけではなく、頭脳明晰で知識は豊富、勇気と決断力の富み、滅私奉公の忠誠心にあふれる人々と信じていた。恐らく、当時はほとんどの日本人はそう信じていたはずだ。

だからみな「日本が負けるはずがない」と思い込んでいた。帝国陸海軍は強いから、というだけではない。優秀有能な日本の軍人が負けるような戦争をするはずがない、と信じていたのだ。当時の最高の意志決定機関だった「最高戦争指導会議」は総理、内務、外務、大蔵、陸軍、海軍の五大臣と陸軍参謀本部および海軍軍令部の総長と次長で構成されていた。十人中総理を含む七人が軍人であり、三人は官僚である。

ところが、太平洋戦争の戦況は日々に悪化、45年に入ると「敵機来襲」が日常的になった。私の家は偕行社とは大阪城を挟んで反対側の東区(現中央区)岡山町だったが、師団司令部にも砲兵工廠にも近い。工廠に落ちる爆弾の轟きに自宅が揺れた。このため、二月末に奈良県南葛城郡(現御所市)名柄の古い隠居店に疎開、村立国民学校に転校した。

「日本は負けている」子供心にそう感じたのは、生まれ育った大阪の家が焼け、沖縄が陥落した45年6月頃だった。

なぜ軍人を偉いと思ったのか

間もなく戦争は終わり、教えられることが変わった。GHQ(国連軍最高司令部)の指令とかで、教科書に墨を塗った。東京裁判がはじまり、ラジオでは「真相はこうだ」という番組が流され、戦争中の日本軍の惨敗振りが知られた。歴史好きの父は、日米双方の太平洋戦記をよく買って来たので、私もその一部を読んだ。そして「日本の将軍や提督が偉くなかった」ことを思い知った。

太平洋戦争の軍首脳のほとんどは、国際情勢や彼我国力の読み方を誤ったばかりか、兵站補給の本質を理解せず、航空機や潜水艦の用法を知らず、兵力配置や作戦行動では判断を誤った。

では、そんな人々を日本国民は何故「偉い」と信じ、最高の地位と最大の権力を与えたのか。その答えは二つある。

第一は成功体験。日清・日露の戦争に勝利したため、日本の軍人は優秀有能だと信じてしまったのだ。

第二は試験の合格者ということだ。昭和のはじめには、軍人は有利な職業と思われていた。だから、各町村で成績優秀身体強健な少年たちはこぞって陸軍幼年学校や海軍兵学校を受験した。そしてその合格者が「月月火水木金」猛訓練を積み、その中でまた最優秀な者だけが、陸軍大学校や海軍大学校に入ることができた。中將、大將まで進めるのはさらに選ばれた者たちである。つまり、「試験合格者だから偉い」太平洋戦争当時の日本人は、みなそう信じていたのである。